

## 司馬遼太郎の地理学\*

— 司馬史観の魅力の根源を探る —

小泉 武栄

(地理学)

### I はじめに

司馬遼太郎は戦国時代や幕末、明治維新に主題をもつ歴史小説で知られる、当代きつての人気作家である。司馬には『国盗り物語』、『関ヶ原』、『竜馬がゆく』、『花神』、『峠』、『翔ぶが如く』、『坂の上の雲』などを始めとして、膨大な数の作品があり、日本人とりわけ中年以上の男性に強く支持されてきた。筆者は、司馬が松本清張とともに、第二次大戦後の日本を代表する優れた作家だと考えている。

彼は恐るべき多作家で、上記の他にも、『空海の風景』や『項羽と劉邦』、『韃靼疾風録』など中国を舞台にした歴史小説を書き、さらに『歴史を紀行する』や三〇冊を超える『街道をゆく』などの紀行文でもよく知られている。近年ではさらに『歴史の舞台 文明のさまざま』や『歴史の中の日本』、『歴史の世界から』、『明治という国家』などの中で歴史評論にも手を染め、日本人の歴史観にも継続的におおきな影響を与えてきた。筆者自身、その影響を強く受けた一人だが、司馬の影響は正規の学校教育で受けたものより、はるかに強かったように思われる。

ところがこれだけ膨大な著作をかかえ、多数の読者に読まれているに

もかわらず、司馬の作品や彼の歴史観に関する論評は、なぜかほとんど行われてこなかった。ややまとまったものとしては、尾崎秀樹（一九七五、再版一九九一）の『歴史の中の地図 司馬遼太郎の世界』と、現代作家研究会編（一九九三）の『ビジネスマン読本 司馬遼太郎』、矢沢永一（一九九四）の『司馬遼太郎の贈りもの』をみる程度で、あとは文芸評論か、いくつかの作品の巻末につけられた「解説」があるだけである。このうち『ビジネスマン読本 司馬遼太郎』は、いわば司馬遼太郎好きのエリートサラリーマンたちの司馬賛歌であり、『歴史の中の地図』と『司馬遼太郎の贈りもの』は、基本的には司馬の作品の解説文が主体を占めているから、本格的な司馬遼太郎論というものはまだ一つもないといつてよいであろう。

最近、著名なジャーナリストである本多勝一の著書についての解説や書評を集めた、膨大な書物『本多勝一を解説する』が刊行された（中野編、一九九二、本文六九二ページ）。また先年亡くなった今西錦司に関する論集や伝記が何冊も出された（たとえば、川喜田監修、一九八九／斎

藤、一九八九／本多、一九九二／丹羽、一九九三。こうした事実と比べると、司馬遼太郎の作品や史論に関する論評がほとんどないというのは、いささか奇妙なことといわざるをえない。筆者は、彼の作品の魅力やその影響力からみて、司馬遼太郎論はもっともっと多くだされてしかるべきだと考えているが、これに関しては大方の賛成を得られるであろう。

極論をいえば、筆者は、司馬遼太郎論が少ないのは、司馬遼太郎の作品があまりにもおもしろく、また彼の史論に説得力がありすぎるためではないかと想像している。彼の、ある意味では意表をついた小説の展開や議論の進め方に、読者がそのまま納得してしまうために、おそらく論評する気がおこらなくなってしまうのであろう。

ただこういつてしまうと、この文章自体、ここで終わってしまい、司馬遼太郎論にならなくなってしまう。そこでもう少し議論を整理し、本稿の目的と筋道を書いておきたい。

本稿では、司馬遼太郎の作品や史論に点在する地理学的な視点をとりあげ、それが司馬の作品をいかに魅力的にしているかを考察するつもりである。しかし議論をわかりやすくするためには、本論にはいる前に、司馬遼太郎の作品の魅力がどこにあるかを検討してみることが必要になってくる。そこで本稿では最初にまずこの作業を行いたい。次にそうした作業を通じて、彼の作品の根底にあるとされる、いわゆる「司馬史観」についてその実体を探ってみる。司馬史観そのものについても論評はほとんど行われていないが、本稿ではこれを試み、その上で上記の作業に移っていききたい。

筆者自身は、司馬が歴史を記述する際、歴史のおおきな流れを見通しながら、歴史の舞台となった地域の、自然地理的、人文地理的条件をつねに考慮してきたことが、司馬史観というものの実体であり、それが彼の作品の魅力をつくりだしてきたと考えている。司馬の作品や史論の中には、こうした地理学的な分析が地の部分、あるいは作者自身の語りとして至るところにちりばめられている。おそらくそれが彼の歴史の記述を非常に魅力的なものにしているのであろう。

ところで民族の歴史や人間の生活を、自然地理的、人文地理的条件か

ら考察するということは、じつは地理学そのものの目的でもある。したがって誤解を恐れずにいえば、司馬遼太郎の作品は、そのまま地理学の作品として読み替えることができるわけである。この文の標題を『司馬遼太郎の地理学』としたのは、そのような事情によっている。筆者は地理学徒の一人として、司馬が地理学に対して好意と理解を示してくれることをじつに好ましく、かつありがたく思っている。本稿はそうした司馬に対し、日頃からの感謝の意味もこめて書いたつもりである。

## II 司馬遼太郎の作品の魅力について

始めに、司馬遼太郎の作品の魅力についてふれておきたい。この点に関しては矢沢（一九九四）の見解があるので、最初にそれを紹介しておこう。矢沢は、司馬遼太郎の小説を「智の小説」であるとし、司馬遼太郎を小説界の革命児であるとした。その理由は次のようである。

一八八五年（明治一八年）、坪内逍遙は『小説神髓』の中で小説というもののある方を説いたが、そこでは小説のあつかうものは、人情に限るとされ、それがその後のわが国の小説を大きく制約することになった。この制約の中からは必然的に、人情、を狭く解して、感情、ととる傾向が生まれ、小説はしだいに矮小化していく。感情の、その根っ子のところは、感性である。感性だけに目をそそぎ、取り出すためには、人間の心のはたらきから、意、智、理、念を慎重に選り除けなければならない。こうして勢いのおもむくところ、小説の主題は、「神経叢のそよぎおのき、そのたゆたい」に限られることとなった。

こうした日本近代小説の自縄自縛に、敢然と反旗を翻したのが司馬遼太郎である。司馬は「情、の波動を尊びながらも、人間の、意、智、理、念、の発動に興味をいだ」き、それらを小説に組みこんだ。つまり文壇の伝統からあつさり分離独立して、智の小説、を作りあげたのである。

智とは何か。それは、人の世に生きる工夫である。ただこれを描くのは簡単なことではない。世にいきるための智、それを表現するためには、世、そのものを描かねばならないからである。明治以来、何人もの野心

家がこれを試みては失敗した。そしてこれを始めて可能にしたのが、司馬遼太郎である。司馬は、世を描くかわりに、「世を観る人の眼を描いた」。司馬は、「人間の傑作」を取り上げる。これらの人物は、「かならず我が身をおさえがたく、世に働きかけ、世にまじわる。その交渉と疾走を通じて」、その人物の「世を観る目がはぐくまれていく」。

矢沢によれば、司馬遼太郎はまさにその過程を描いているのであり、人物という光源が豊かであるために、周囲の風景が映えて輝くのだという。大筋は矢沢のいう通りであろう。司馬遼太郎はやはり文壇の革命児だったのである。このようにみえてくると、司馬遼太郎論がほとんどないというのもうなづける。司馬遼太郎の歴史小説は、従来の小説とはあまりにも大きく異なっており、従来型の文芸評論にはなじまなかったのである。

ところで上の引用からもわかるように、矢沢の表現はまことに文学的で、ところによっては禅問答のようなところもあり、ややわかりにくい点がある。そこで本稿では、改めて筆者自身のことばで司馬遼太郎の魅力を考えてみたい。ここで述べる司馬の魅力は、じつは筆者自身を感じていることにほかならないが、おそらく大方の賛意を得られるのではないかと考える。司馬遼太郎の作品の魅力は次の七つにまとめられる。

## 1 登場人物がきわめて魅力的であること。

坂本竜馬や西郷隆盛、あるいは『峠』の河合継之助や『花神』の大村益次郎のように、司馬の作品の主人公には魅力的な人物が多い。彼らの多くは最終的には非業の死をとげるが、それまではじつに楽天的で、精力的に活動し、幾多の困難にもめげず、難局を乗り切っていく。日常生活にあくせくしている小市民の読者にとっては、主人公に自分を同化することができるといふ点が、たまらない魅力となっているように思える。司馬遼太郎の歴史小説は、単なる娯楽のための歴史小説ではない点がおおきな特色になっているのである。『国盗り物語』の斎藤道三や、『箱根の坂』の北条早雲などもややタイプは異なるが、魅力的な人物であること

は間違いない。

矢沢はこの点について次のように述べる。

「司馬遼太郎は、読者をけっして萎縮させない。逆に、やさしく励まして、元気づける。(中略)人の世の、むつかしさ、を描きながら、意気を喪失させないのである。ハッパをかける、のではなく、慰撫して、医す、のである。」

『ビジネスマン読本 司馬遼太郎』では、この点を、司馬遼太郎の天才好み、としている(注1)。いずれにしても、このような司馬遼太郎の作品を数多く読めることは、まさしく「現代人のおおきな幸福である」に違いない。

## 2 歴史のおおきな流れを把握していること。

司馬遼太郎の作品や史論には戦争が主題になっているものが多い。しかしそれは単に鉄砲を打ったり、刀や槍で相手にたち向かったりするという、いわば技術的、戦術的なレベルにとどまらず、戦略的、地政学的な分析から、さらにはその戦争の歴史的な意味にまで話が展開する。その結果、我々は個々の人物の行動を通じて、歴史のおおきな流れまでを把握できるのである。

この例に代表されるように、司馬の作品ではささいな事件にも歴史的な意義を認め、その意味を解説してくれていることが少なくない。この点は、歴史的事実に対する恐るべき博識ぶりとともに、司馬遼太郎の魅力の重要な要素となっているといえよう。

具体的な例をあげはじめるときりがないが、この点に関する例を二、三あげると、たとえば次のようである。『明治という国家』の中で、司馬は世界史の中の明治維新の意義について論じているが、明治維新が革命にあたるものであることは認めつつも、明治という時代が江戸時代から継承しているもののきわめて多いことも明らかにしている。明治という国家が突然、近代化し成長を始めたのではないということである。司馬は同時に、日本国内の状況だけでなく、明治維新を可能にした当時の世界情勢についても分析しているが、この二つの視点や分析は、最近でこ

そうした考え方にたつ人がでてきたとはいえ、やはり独特のものであるといえる。筆者のような歴史に対して無学な人間にとっては、司馬の史論や解説はたいへんありがたいものである。

同じ本の中の、日本の学歴主義が、廃藩置県によって職を失った侍たち（士族）が、なんとか食いつなぐために一生懸命勉強をしたことに始まるという指摘なども、現代の日本人というものを考える上できわめて示唆に富むものといえる。

『歴史の舞台 文明のさまざまな』の中では、遊牧文明が、紀元前何世紀かに人間が馬に乗って羊の群の中に入り込むことによって発生し、そのことが世界史を大きく変えることになったと論じている。司馬の視野は人類の歴史そのものにまで広がっているというべきであろう。

これらの例に限らず、司馬の作品では、一つの歴史上の事件がそれだけで完結してしまうことはまずなく、つねに予想できないほどの広がりをもって展開していく。この点もまさに司馬の魅力といえよう。

### 3 文明のシステムについての論及があること。

人間は一人で生きているわけではない。必ず何らかの政治体制、社会体制に属しており、その中である役割を果たしながら生活している。また世の中には、生産のシステム、流通のシステム、教育のシステム、といった具合にさまざまなシステムがあり、個人個人はそうしたさまざまなシステムと関わらなければ、生活ができない。

これまでのわが国の小説では、このようなシステムに論及することはほとんどなかった。しかし司馬の小説や史論ではこれらのシステムを進んで取り上げている。読者はそれによって当時の社会情勢をきわめて具体的に理解できるのである。たとえば『国盗り物語』には、次のようなくだりがある。

「この里に鎮座する山崎八幡宮は、社領こそわずかだが、油の専売権をもっていて、この八幡宮のゆるしがなければ、油を売ることも、原料の荏胡麻を産地から運んでくることもできない。

近国、遠国の油屋どもは、金銀を八幡宮におさめて製造、販売の権利

を買いとるのである。その権利も一年かぎりのもので、翌年になるとまた金銀をおさめねばならない。」

これはまさに戦国時代の流通システムであろう。

主人公松波庄九郎（後の斎藤道三）の奈良屋は、ルールに違反して油の販売を行ったことで、大山崎の神人たちによる打ち壊しを受けるが、これは当時の流通システムに対する破壊行為だったからこそ行われた制裁行為といえる。

このような種々のシステムへの言及は個人のおかれた立場を非常に鮮明にし、歴史の流れについての理解を助けてくれる。後述する司馬史観は、このような基礎の上に築かれたものであると考えることもできる。

### 4 日本人が対象であること。

矢沢は、司馬文学の問題意識は、日本人とは何か、である、と看破している。この指摘は重要である。ただし矢沢によれば、司馬の問題意識は、いわゆる日本人論とは違うという。日本人論では、一般的な日本人というものが問題になる。しかし司馬遼太郎においては、日本人なるものは念頭にない。彼が描くのは、ひとりの日本人である。彼は、日本人を次々と描いた。坂本竜馬しかり、豊臣秀吉しかり。『街道をゆく』に登場する人物も日本人であつたし、『木曜島の夜会』の真珠採りの漁夫も日本人であつた。司馬はいまだに日本人を書きつづけている。登場する日本人はすべて個性的である。これが魅力を感じさせないわけがない。

### 5 人間に対する偏見のないこと。

世界中見回しても、特定の人種や少数民族に対する偏見や差別意識をもたない民族や国民はおそらく皆無であろう。こうした偏見や差別意識が歴史的にさまざまな悲劇をひきおこしてきたことも周知の事実である。もちろんこのことはけっして望ましいことではないし、学校教育ではそうしたものを排除すべく教育がなされているわけだが、長年にわたる家庭や社会での教育や体験を通じて、ほとんどの人が偏見や差別意識を抱えている。黒人に対する偏見はその最もたるものだし、わが国ではアイ

又の人たちや在日朝鮮人・韓国人・イラン人に対する差別意識が代表例としてあげられよう。

偏見や差別意識をもつことから免れている人はほんのわずかなのであるが、司馬遼太郎がそのわずかな例外に入るとは間違いない。司馬の少数民族や被抑圧民族、あるいは敗者に対する目はとても暖かい。司馬は彼らの立場を非常によく理解し、弁護してくれている。その例はたとえば、アイヌの人たちを訪ねた『オホーツク街道』やアイルランドのケルト人を訪ねた『愛蘭土紀行』、あるいは東北の上北地方を訪ねた『陸奥のみち』などいくらでもあげることができる。幕末、火中に栗を拾うような形で時勢の中に押し出され、その揚げ句、戊辰戦争で敗北し、さらに下北半島に移住させられる会津人のことを、司馬は再三にわたって書いているが、この辺りのくだりなど、会津の人たちは今でも涙のでる思いで読んでいるに違いない。そして現代に司馬遼太郎という理解者を得たことを感謝したに違いない。

その反面、司馬は、実力以上の虚名を得たものについてはたいへん厳しいところがある。たとえば、『坂の上の雲』では、日露戦争の山場・旅順攻防戦で再三にわたり、失敗を繰り返した乃木大将の無能力ぶりを情け容赦なくあばいているし、太平洋戦争の際の軍部の無能力ぶりについても繰り返し書いている。

このような偏見のなさは他の作家にはなかなか求められないものである。筆者は司馬遼太郎の人気の元は、一つはこの辺にあるのではないかと考える。

## 6 紋切り型でない歴史の記述

前のことにも関係するが、われわれはこれまでの教育のおかげで、多数の歴史的・地理的な「常識」を身に着けさせられている。たとえば、戦国時代はいつも戦乱に明け暮れていたとか、江戸時代は武士農工商の身分制度にしばらくは、一揆の頻発した、暗い時代であったとか、アフリカに住む人たちは裸で暮らしているとか、あげはじめるときりがない。利に聡い華僑とか、インドには乞食が多いとか、ごく一部のことをとりあ

げて全体に及ぼすようなことも、しばしば行われている。「日本のチベットの」などという、そこに地域の人たちにとってもチベットのの人たちにとっても、両方に対して失礼な表現も、よく使われる。

司馬遼太郎の作品は、こうした「常識」をもののみごとに打破してくれる。具体的な事例は後の方であげるが、司馬の史論や小説、あるいは『街道をゆく』などを読んでみると、常識がくつがえされ、「ああ、そうだったのか」と思われることが多い。このことも司馬遼太郎の作品のおおきな魅力といえよう。もちろん、歴史に対する新しいものの見方を獲得できるという副産物のありがたみも忘れることはできない。

## 7 博学とその基礎にあるあらゆるものに対するあくなき好奇心

司馬遼太郎はおそろしく博学である。おそらく一度目にしたり、耳にしたことは忘れることがないのであろう。ただ司馬の博学は単なる物知りとはもちろん違っている。物知りはよくものを知っているだけで、新たなものをつくり出すことはないが、司馬の場合は知識が有機的に結びあわされ、独特の歴史が紡ぎだされる。そこが違っている点である。司馬をみると、人間に与えられた能力の大きさに呆然としてしまう。これはベートーベンやゲーテの作品に向かいあったときとまったく変わることがない。

たとえば、『街道をゆく29』の秋田県散歩の中で、司馬は、雄物川河口付近の砂丘の飛砂をくいとめるための植林を行った、栗田定之丞のことを紹介している。そのくだりを引用する。

「定之丞はさまざまに試行し、結局、確実な方法を見出した。

まず初期段階での砂ふせぎとして、わら（または萱）を束にして砂に半ば埋めるのである。

それをいわば壁にしてそのかげに柳の苗をうえる。翌年、その柳の稚樹のかげに、グミとハマナスをうえる。

そのつぎの年は、グミのかげにねむの木をうえる。

まことに植物社会学的方法といってよい。

それらがぜんぶ活づいたとき―気の遠くなるようなことだが―はじめ

て砂防の主役である黒松の苗をうえるのである。

八、九年にして、それらの植物がみな勢いづいた。砂の上にも植物がはえることを、藩も農民も知った。」

定之丞が植林の費用が藩からでないために、たいへんな苦勞をし、ようやく植林に成功するまでのいきさつである。

彼の死後も植林はつづけられ、江戸末期には数百万本の松原が、秋田藩領の長い海岸を砂からまもるようになっていくのだが、司馬自身はこの話を「新秋田叢書」のなかの『彦根園茶話』でよんだという。

こんなところまで目を通す作家は、おそらく稀であるに違いない。

また『街道を行く24 近江散歩』には、金阿弥という人物が登場する。彼は彦根山を切りくずして城下町を造成したために、琵琶湖に注ぐ川の川口洲における魚の生態が変わったことに気がつき、それを絵図に書き込んでいるという。関ヶ原の戦いの直後のことである。司馬遼太郎はどこでこんな知識を得たのだろうか。

この類のことはそれこそ無数にある。

司馬の博学を支えているのは、おそらく彼のあらゆるものに対する好奇心であろう。もちろん興味の中心は人間だが、これほど何にでも興味をもつ人も珍しい。たとえば私の郷里のことなど、自分ではよく知っているつもりだが、もし仮に司馬が『街道をゆく』の中で私の郷里のことを扱ってくれたとしたら、そこには私の知らないことがおそらく次々に現れるであろう。司馬遼太郎の興味の広さはそれほどのものである。このような期待感が司馬遼太郎の小説を魅力的にしていることも間違いないであろう。

### III 司馬史観について

歴史小説や評論、随筆などにおける司馬の歴史の記述はきわめて独特で、それはしばしば「司馬史観」と呼ばれてきた。たとえば、『歴史の中国の日本』の中公文庫版の裏表紙には次のような内容の紹介がある。

「司馬史観という言葉がある。歴史小説の世界に革命的な変化をもたら

した著者が、圧倒的に読者をひきつけてやまないものは何か。それを人は司馬史観と呼ぶ。研ぎすまされた歴史観と豊かな創造力は、激動する歴史の流れと、その中に浮沈する多彩な人間像をみごとにとらえ、それをわれわれ現代人自身の問題として解き明かす。」

この一文は、司馬史観というものの性質をきわめて適切に紹介しているといつてよい。司馬遼太郎の史論の魅力は右の数行に集約されるだろう。

ただ先にも述べたように。司馬史観というものの実体がこの文で明らかにしたわけではない。ここで述べられているのはあくまで結果としてこうなっているということであって、司馬遼太郎の歴史の把握の方法については依然、不明なままである。本稿で司馬史観の実体を分析しようというのは、この辺りに意味がある。

この点について司馬自身のことをばを借りれば、次のようである。

「ビルから、下をながめている。平素、住みなれた町でもまるでちがった地理風景にみえ、その中を小さな車が、小さな人が通ってゆく。

そんな視点の物理的高さを、私は好んでいる。つまり、一人の人間をみるとき、私は階段をのぼって行って屋上へ出、その上からあらためてのぞきこんでその人を見る。おなじ水平面上でその人を見るより、別なおもしろさがある。

もったいぶつたいいい方をしているようだが、要するに「完結した人生」をみることもおもしろいということだ。(中略)

ある人間が死ぬ。時間がたつ。時間がたてばたつほど、高い視点からその人物と人生を鳥瞰することができ、いわゆる歴史小説のおもしろさはそこにある」(『私の小説作法』より)。

また『歴史小説をかくこと―なぜ私は歴史小説を書くか』のなかで、司馬は次のように述べる。

「某という人物その人生というものは、その某の人生が完結したあと、時間がたてばたつほど、私にとっては好材料になるようである。時間が経たねば、俯瞰ができない。俯瞰、上から見おろす。そういう角度が私という作家には適している。たとえばビルの屋上から群衆を見おろし、そ

の群衆のなかのその某の動き、運命、心理、表情を見おろしてゆく。この俯瞰法（つまり歴史小説をかく視角）で某を見るばあい、筆者は某その人以上に某の運命とその環境、そしてその最期、さらに某の存在と行動がおよぼしたあととへの影響、というものを知らなければならない。（中略）

歴史小説はそういう視点に立っている。そういう視点でものを見ることの好きな、もしくは得手な人が歴史小説を書くのだろう。私もその一人である」

要するにすでに死去した人物については、彼の人生を丸ごと俯瞰、あるいは鳥瞰することができから、歴史小説の執筆が可能だといえるのである。

司馬の視点はこれでかなりわかりやすくなったが、俯瞰するあるいは鳥瞰するというのが、どのような手順によって行われるかは、依然、不明のままである。

司馬遼太郎的な歴史を書くことは、現状ではおそらく彼以外は不可能であろう（注2）。しかし司馬の歴史記述の手順と方法を明らかにすることにより、他のそれほど才能のない作者にも、もしかしたら（やや程度は落ちるにしろ）、似たようなものを書けるかもしれないのである。以下では、司馬遼太郎の小説や史論を題材にして、司馬史観の実体と構造を探ってみたい。

#### IV 司馬史観の構造についての分析

##### 一 具体的な事例の提示

次に、いかにも司馬遼太郎らしい歴史の記述や史論を取り上げ、その共通項を探ってみることにしよう。具体的な事例は無数にあげることができるが、ここではその代表的なものにとどめる。

##### 事例① 『人物 中国の歴史3 戦国時代の群像』から

「春秋戦国は、戦乱ということに力点を置くと、つい本質を見失って

しまう。金属の生産と入手が、前時代よりもはるかに盛んで、容易になったようである。金属は農具として用いられ、またあらたに農地をひらくための農業土木の工具として用いられた。このため開墾地主や自作農がふえた。さらには商品経済が戦国末期には大きく成長した。要するに、沸騰した社会になった。

殷・周のころからいえば、農奴か奴隷にすぎない耕作階級の者が、社会に對し、自分の世の中だという自信をもったのである。この自立性と自信が、人間が物を考えるという面において、諸氏百家の出現という多様な思想状況をうんだ。」

あたかも経済史の一文のような記述である。

諸氏百家の例として司馬遼太郎は、君主も人民とともに耕すべきである、と説いた許行や、「民を貴しとなす、君を軽しとなす」と、じつに過激なことをいった孟子をあげているが、これらは「古代的状况での生産の沸騰的な高揚と、世間にみちあふれた人間としての自信や自覚という戦国期の基盤を考えないと鮮明には理解できない」とする。

この生産力の高揚をもたらしたのは、鉄器の普及であった。鉄の農具は生産を沸かしたせ、人口を増やし、多数の兵士や工人や思想家を養うことを可能にした。その結果、「中国史にあっては、戦国が人間文化の頂点にあり、むしろ以後は退行するとさえいえなくはない」状況が生まれたのである。その中からは、家族を越えてすべての人々を愛するという思想でまとまった墨子教団が生まれてくるが、この集団について司馬は、「紀元前、地球上の人類のほとんどがまだ採集段階にあったとき、この大陸の文明においてはすでにこういう無私と愛を高唱する倫理的狂気が教団として存在したというだけでも、ふしぎな思いがする」と述べる。まさにその通りで、我々は諸氏百家は知っていても、こうした意義づけはなかなかできない。ここに紹介したような記述がさらっとできるのが、司馬遼太郎の魅力といえる。

「秦を強秦たらしめた第一のものは、その自然・人文地理的条件である。関中かんちゅうという中原からみれば北西方の辺境の広大な台地に位置する。こ

んにちの地理的呼称でいえば、陝西省の渭水盆地を中心とした黄土地帯である。(中略)

秦が国土とする関中の黄土層は、農耕に適していた。

黄土は土壌として保水がいいだけでなく、鋤切れがよく、原始的な木製農具で十分耕せる。その上、後世「関中八水」などといわれたように、水量の多い河水が台地をうるおして作物の出来がいい。灌漑用水さえうまく工事すれば、十分、大人口を養えるのである。秦のはじめは、むろん灌漑土木をおこすまでにはいたらないため、まだ微力であった。

地理的に有利なのは、西方の冶金技術が入りやすいということもあった。関中台地は西域への回廊の出入口になっている。漢以前、西方とは公式な関係はなかったが、文献として跡づけられないながら、西方の技術の流入は相当なものであったかと思える。そのことは、近年、秦の始皇帝陵から発掘された兵馬俑などを見てもわかる。いままでの中国の出土文物とはひどく違う系列なのである。(中略)

秦の有利さは、それだけではない。関中台地は東方の中原に対し、広大な高床をなしている。中原からそれへ入るには、函谷関の嶮を登らねばならないのである。外敵に対しては関門をとぎすが、みずから出兵しようとするときは、ひらく。不利とみれば退いて関門を閉じればいい。東は函谷関だが、西には隴関と散関があり、南は武関、北は蕭関があるとされた。国家そのものが天府のような大城郭をなし、とくに中原に対する函谷関が軍事的に大きな機能をもっていた。」

引用が長くなったが、秦という国家が富強になった理由が非常によくわかる説明であるといえる。

## 事例②『街道をゆく7 砂鉄の道』から

「沖繩に何度か旅行して感じたことは、沖繩人の温和さである。

沖繩に住むひとびとは、いかにも固有ののちのちの日本人的形質をもち、ことばも奈良朝もしくは室町時代に分化した日本語を話している。日本人よりも日本人であるこの地のひとびとが、日本人が集団になった場合のたけだけしさや、鋭敏すぎる好奇心からまぬがれているのは、歴

史的に鉄器が不足していたことに有力な原因があるのではないか、とふと思ったりした。

沖繩はこの稿の沖繩の旅ですでにふれたように、石器(木器をふくめて)時代が、本土の室町時代までつづいた。その後も、鉄器はつねに寡少で、農具は生産性の低い木器がしばしば主力であるという歴史がつづいた。木器の稼働能力が人間の欲望の限界をなしたということが、沖繩人のおだやかな正確をつくるのに、よほど重要な原因をなしたかと思える。」

沖繩に比べれば、本土への鉄器の到来ははるかに早いのだが、それでも、

「東アジアにおいて、日本地域は鉄器の後進地帯であった。鉄器の到来が遅れたどころか、青銅器時代さえもたず、要するにこの島々に住むひとびとは、冶金によって金属をつくって強力な生産力をもつということを知ることなくながい年代を過ごした。この島々に鉄器時代が到来するのは、弥生式農耕が入ってからのことらしい。さらに鉄器が多量に生産され、普及しはじめるのは、ようやく古墳時代になってからである」このように鉄器の普及に関して、日本と中国大陆との間には信じがたいほどの落差があるのだが、司馬は次のように述べる。

「だからといって日本人が負けめを感じる必要はないであろう。

中国に興って熟した大文明は、ひとつの特徴として、海を渡って島嶼へゆくことをおっくうがったということがある。

中国大陆人は海岸で漁撈することをきらったし、また島へ渡って島で住むこともきらった。

たとえていえば、中国大陆の南部に接して台湾というあれだけ大きな島がありながら漢民族の移住がはじまるのはやと十七世紀になってからで、海南島にいたってはそれ以後である。

それからみれば、日本列島は、やや幸いしている。紀元前に稲作を知る民族が渡海してきたし、その後何世紀か経って、製鉄という古代における最高の技術をもったひとびとが渡ってきて大いに農耕生産をあげ、ついに古墳を築くという土木事業をおこせるまでになった。これらの渡

来人流入は、日本の島々が水が豊富で稲作の適地であるうえに、マラリアのような風土病がないということが、朝鮮半島をふくめた東アジアの沿岸地方に、古代的な情報としてつたわっていたからであろう。」

さらに

「東アジアの製鉄はヨーロッパが古代から鉱石によるものだったのに対し、主として砂鉄によった。

砂鉄は、花崗岩や石英粗面岩のあるところなら、どこにでもある。問題はそれを溶かす木炭である。

「二に粉鉄、一に木山」(鉄山秘書)

というように、古代にくらべて熱効率のいい江戸中期の製鉄法でも、砂鉄から千二百貫の鉄を得るのに四千貫の木炭を使った。四千貫の木炭といえ、ひと山をまる裸にするまで木を伐らねばならない。木炭四千貫といっても、江戸期のやり方ならわずか三昼夜でつかってしまうのである。

砂鉄というのは、花崗岩のなかにわずか数パーセントふくまれているにすぎない。しかし鉱石とちがってほぼ遍在しているといつてよく、である以上、鉄が作られるためにもっとも重要な条件は木炭の補給力である。樹木が鉄をつくるといつていい。

さらに、その社会で鉄が持続して生産されるための要件は、樹木も復元力がさかんであるかどうかである。この点、東アジアにおいて最も遅く製鉄法が入った日本地域は、モンスーン地帯であるために樹木の復元力は、朝鮮や中国にくらべて、卓越している。

古代は、中国も朝鮮も冶金時代がはじまるまでは、鬱然たる大森林がゆたかに地をおおっていたかと想像する。

漢民族の文明が興った黄河流域も、おそらく青銅器を作っている程度の時代までは、いまのように樹木の少ない曠野ではなかったであろう。朝鮮半島も同様、こんにちその風景の特徴と象徴される禿山などは、あるいはなかったかもしれない。朝鮮の禿山は冬季のオンドル用の薪を採りすぎたからだといわれているが、古代朝鮮の金属文化の高さを思うと、かならずしも採炭用の伐採だけが原因でなかったと思えてくる。乾燥した

中国内陸部や、鴨緑江流域をのぞく朝鮮は、いったん森林をほろぼすと、容易に復元できないのである。

この点、梅雨期から夏にかけて高温多湿な日本は、山そのものが多量の水をふくんでいわばスポンジのようになっており、今日の強力な土木機械による自然破壊がはじまるまでは、日本では禿山にしようとするほうが至難だといわれてきた。このため、上代以来、はるかにのちの石炭を燃料とする溶鉱炉の出現まで、砂鉄によって鉄をつくるのに木炭が不足などということは、全国をおしなべていえばまったくなかったといつていい。この意味では、明治までの日本の鉄は、日本の豊富なみずがそれをつくってきたということが言える。(中略)

話が飛ぶが、日本の平安朝の中期ごろには、鉄生産がよほど盛んになって、鉄製農具も十分にゆきわたったかと思える。

律令制のもとでは土地は原則として公有であったにもかかわらず、鉄製農具の普及によってひとびとに開墾や灌漑土木による新田の開発欲をそそいたのであろう。平安期以前は、関東平野の水田面積は知れたものであったろうが、ここに灌漑土木をおこして新田を作る勢力がふえた。その田地を基礎に、武士という、実質的には農場主が成立した。かれらが新田を作ることを競いあい、ときに武闘によって他人の田を奪おうとしたという風景を思いうかべるとき、もしかりに平安期でもなお木器が農具であったならそういう現象はおこり得なかったにちがいない。

木器や石器が道具の場合、人間の欲望は制限され、無欲でおだやかたらざるをえないのである。

木の棒で地面に穴をあけてヤムイモの苗を植えたり、木製のヘラで土を掻いて稲の世話をしているぶんには、自分の小人数の家族が食べてゆけることを考えるのが精一杯で、他人の地面まで奪ったり、荒蕪の地を拓こうなどという気はおこらないし、要するに木器にはそういう願望を叶える力はない。鉄器の豊富さが、欲望と好奇心という、現象的にはいかにもただけだけしい心を育てるのではないか。

日本は室町期から戦国期にかけて、農業生産高が飛躍する。農業者一人が、何人もの非農業者―武士、商人、馬借、車借、遊芸人、僧侶など―

を食わせるだけの余剰分ができた社会といえるであろう。

商品経済の賑わいは、空前といっている。たとえば桶けづという商品を大量に作るにしても、指物道具という鉄器が無数に要る。(中略)

この時代の一特徴は、数寄屋普請や城郭建築の盛行だったが、この技術をささえるためには、多種類の大工道具や指物道具を必要とした。これも鉄である。鉄が少なければ、ひとびとを駆ってこういう建築を嗜好せしめたり、自分も建てたいと願望させたりすることはできない。さらにはこの時代に勃興した商品経済が江戸時代にひきつがれて日本の充実を見、明治の資本主義の導入を容易にするのである。

これに対し、朝鮮は古代文明を与えたきらびやかな恩人であったが、しかしいつの時代からか、停滞した。

七世紀の新羅の統一以後、中国の制度を導入して、古いにしへの良しとする——停滞そのものを文明とする——儒教体制をとり、とくに十四世紀末から二十世紀初等までつづいた李朝は、本場の中国以上に精密な儒教国家をつくりあげた。

このことは、鉄器の不足と無縁ではない。鉄器の不足が商品経済をこの国で成立せしめず、農村は原則として自給自足経済を保った。たとえば農家では桶のような商品はつかわず、大きなヒサゴを二つに割って水汲みに使った。ごく最近まで朝鮮での手桶というのは、自然物であるヒサゴであった。

朝鮮人は歴史的にも優秀な民族だし、また手工芸においても高い能力をもっていることはいくつもの例で証明できるが、しかしその能力を十分に反映した社会を近世まで持ちえなかった理由の一つは、鉄器の不足にあるといつてよく、同時に鉄器の不足が農業生産力を飛躍させず、旺盛な商品経済を成立せしめず、せしめなかったからこそ、李朝五百年の儒教国家がゆるがなかったといえるかもしれない。

このことは、中国の長い停滞を考える場合にも、多少は通用するかもしれない。同時に裏返せば、日本列島に住むわれわれが、他のアジア人たちがった歴史と、そしてときに美質でもあり、同時に病根でもあるものを持ってしまったことにもつながっている。要するに、砂鉄がそうさ

せたのではないか」

#### 事例④『街道をゆく34 大徳寺散歩』より

「室町時代は、初期に南北朝の乱があり、中期に応仁・文明の乱があり、中央・地方とも、乱が慢性化していた。

一方においては、山野や河口平野が開拓されて美田になり、裏作に大麦をうえる二毛作が一般化し、農業生産高があがって、その生産高の上に、国人・地侍じきまつらい（武装農場主たち）といったあたらしい勢力が勃興し、古い武家体制をゆるがせた。また生産高が高くなった農村から、氏素姓しじょうせいのない足軽という専門的な戦士があらわれ、旧体制の傭兵になったりした。

さらにいえば、製鉄生産も飛躍し、また堺や博多などを通じて私貿易が一大活況を呈した。いわば、国際化の時代でもあった。

このような怒濤の時代にあつては、心あるひとびとは不変の価値にあらがれざるをえない。

一方においては、親鸞の子孫である念仏の蓮如（一四一五—九九）の他力道たうりきどうが農村の国人・地侍・僧に普及し、また純粹自力道である禅が、堺の貿易商たちのあいだにふかく滲みこんだ」

「室町といえは、現在の日本文化の源流がことごとくこの時代から興っているのである。その点では、華麗このうえもなく、もし日本史に室町時代をもたなかったら、私どもの文化はごくつまらないものになっていだろう。

当時、日本は中国とその南方までをふくめた貨幣経済のなかにすすんでまきこまれていたが、その貨幣が、外国文化をもたらし、それに触発されて日本独自の思想文化と生活文化あるいは新興芸術が醸成された。思想においてはたとえ禅があり、浄土教が普及した。

生活文化においては、建築様式が一変した。食生活も変り、さらに芸術においては能・狂言、また茶や新様式の絵画などがむらがり興った。世はまばろしである、と思いつつも、ひとびとは生きる楽しさを知ったのである」

## 事例④『街道をゆく3 陸奥のみち』から

「いまさら振りかえっても仕方のないことだが、東北という、とくに太平洋岸の陸奥という、この乾いた寒冷の風土にたとえば北欧諸国などの国土経営法の下敷をあてることによって――つまり白河以南の米作地帯とは別原理の思想でもって――有史以来の東北経営をやり変えてしまおうという構想が、明治初年に思いつかなかったものだろうか。もしそれがなされたとしてすれば、百年後のこんにち、たとえば四国地方の面積を一県でもつという広大な岩手県などは蜜と乳の流れる山河になっていたかもしれないのである。(中略)」

日本の上代天皇制というのは弥生式農耕が西から東へどんどんひろがってゆくにつれ、それと表裏いつたこととなって教勢が自然にのびて行つたという宗教的存在で、べつに戦国時代の英雄たちのように攻伐によって版図を斬り行つたものではなかった。いわば上代の天皇制とは農業の同義語かもしれず、より適確に言えば農業の権威的象徴というべき存在で」あった。

しかしながらこの新しい農耕の普及者は

「農といい、獵というこんにちからみれば単に職業のちがいにすぎない者を、この当時の畿内人は夢にも思わず、農業化したもののみを「王民」といい、そうでないものを凶悪な異民族であるとした」

つまり農業が正義の体系として現れ、本来、米作には向かない南部地方にすら、米をつくることを強制し、もし作らねば世間の仲間に入れてもらえないような体制をつくつてしまふのである。江戸時代もちろんその例外ではなかった。

もともと奥州の高原は名馬を産出した。平安の末期に藤原三代が異常な繁栄をみせるのは、砂金がおおいに出たということもあるが、牧畜による力の方が大きかったという。しかし江戸期に入ると戦乱がなく、馬の需要が激減し、奥州の経済は大きな打撃を受ける。

こうして風土にあわない産業を強制されることによって、陸奥では飢饉が常態化し、このことは後に、安藤昌益を生み出すことにつながって

いく、というのが、司馬の考え方である。非常に理解しやすい説明であるといえよう。

## 事例⑤『街道をゆく30 愛蘭土紀行I』より

「十六世紀、カトリックからプロテスタント(新教)が分離する。

このあたらしい宗教運動とその教義は、産業や商品経済の盛行と不離のものだった。

大ざっぱに言えば、当時(十六、十七世紀)のヨーロッパ庶民にとってカトリック教徒であるということは、のんきなものだった。なにしろ教会が神の卸し元になってくれていたのである。

信徒たちは、神については教会にまかせきりで、それを頼りきったまま、口をあげた無知文盲でいることさえ可能だった。(中略)

ところが、十六、十七世紀、もしくはそれ以前から、商品生産と流通がさかんになるにつれて、とくに都市のひとびとの頭の働きが忙しくなった。農村から出てきた者たちが、商人になったり、工場の親方、もしくは船の船長や会計係になったりすると、それ以前、農村の中で、教会と慣習にくるまされてのんきに過ごした日々がうそのように思われた。

いわばべつの動物になったように、個人が矢おもてに立たされた。個人としての責任や義務だけで生きてゆかざるをえなくなったのである。(中略)

商取引は、あくまでも個人が個人に対しておこなう。神との取引も同様で、ローマ教会という中間業者を外して、神に対し自分自身がじかに取引せざるをえなくなった。それが、新教(プロテスタンティズム)というものだった。

自然、新教は徹底的に自立を要求した。

もはや神と自分とのあいだには変電装置や避雷針がなくなった。神は雷のようにつねに垂直に個人の上にあり、罪や背教の行為については、神は轟々と落雷するようにじかに個人の上に上に落ちるのである。このため、新教の初期から十九世紀ごろまでのプロテスタントの信徒の典型は凜乎(りんぷ)として敬虔なものであった。

この精神が、同時期に勃興してきたビジネス文明にもよく適った。というよりも、初期ビジネス時代を動かした精神と、プロテスタントとは不離なものであった。」

同じ趣旨の説明が『街道をゆく35 オランダ紀行』にもあるが、新教の発生過程が歴史の教科書よりもはるかによくわかるような気がする。

#### 事例⑥『街道をゆく35 オランダ紀行』より

「画家といえば、オランダは、絵画の国でもある。十七世紀にレンブラントを生み、十九世紀にはゴッホを生んだだけでも、この国は人類に大きく貢献した。

それに静物画や人物画や風景画といった分野を開発(?)したのも、十七世紀のオランダ人だった。それまでの画家で、たれが、ただの農家のテーブルや、無名の市民や、へんてつもない田園が絵になると思ったろう。十七世紀のオランダ人たちは、絵画から物語性を追い出したのである。

もっとも追いださざるをえなかった。

なにしろ、この国は、画家にとって大きな注文主だったカトリックを否定したために、聖画のしごとがなくなったのである。それまでヨーロッパでの一般的な画家のしごとというのは、聖堂や教会にかざる聖書物語の絵をかくことであり、さらには貴族やその家族の肖像画をかくことで生計をたててきた。

オランダには貴族制がないにひとしく、いても、画家に肖像画をたのむほどの財力はもっていなかった。

だから、レンブラントはときに裕福な商人から肖像画をたのまれることがあっても、ひまなとき(?)には自分自身や自分の家族を描いたり、銅版画<sup>エッチング</sup>ながら、乞食の絵まで描いた。(中略)

要するに、十七世紀のオランダに激烈なほどの商人的市民社会が成立していたことが、絵画史に濃厚に反映されているのである。

#### 事例⑦『歴史の舞台 文明さまざま』より

#### 『遊牧』

というのは、よく誤解されるように、古代的な未開な形態と考えるべきでない。すでに地球のあらゆる場所で農業が営まれていた歴史時代に、突如あらわれた新形式の暮らし方なのである。

それまで草原に人類は住んでいなかったであろう。(中略)

採集すべき木ノ実もないし、けものに近づこうにも、一望の平坦地であるために、相手が逃げてしまふ。採集時代の人間はやはり森のある土地がその棲息の適地で、農耕時代になると、人間たちは森から出て低地に棲み、河の氾濫が繰り返される湿潤の地やオアシスで穀物などを栽培した。むろんこの段階においても草原は見すてられた地だった。

#### 「草原で住む」

という暮らしのシステムを考えついた偉大な民族は、スキタイであった。

#### (中略)

かれらはイラン系の民族で、紀元前六世紀にこの草原に出現して、まず馬に騎<sup>の</sup>るといふ他の民族にとっては奇抜すぎることを創始した。

と同時に、遊牧を考えだした。草原に郡棲している羊の群れのなかに入りこみ、それらが草を食って移動してゆくままに人間も移動する。さらには他の肉食獣からかれらを守るといふ役割を人間が果たすことによって人間の方から羊の群れに寄生するという不思議な方法の発明であった。それまで人類は羊を人間の住居にひきよせ、手もとに置いて飼うことはしてきたが、人間が逆に羊の群れのなかに入りこんで移動するという暮らし方はなんとも奇抜なものであった。

その「文明」を成立させるためには、機敏に人が駆けまわらねばならない。そのために騎馬が必要であつたし、さらには家屋を固定せず、簡便に移動しうる天幕も開発せざるをえなかった。山羊を飼い、馬も飼った。豚だけは飼わなかった。豚は農民という定着者のための家畜で、遊牧者がこれを飼うと軽快に移動できなくなるのである。』

## 二 司馬史観の構造

以上、司馬遼太郎の文章の特色がきわめてよく出てくる部分をいくつか紹介した。これらの文章をもとにして、司馬史観の構造を探ってみよう。

ある地域のひとびとの生活もしくは文化を考える上で、司馬遼太郎がまず最初に考慮に入れるのは、その地域の自然地理的条件であるといつてよいであろう。事例の①、②、⑦あたりに典型的に現れているように、司馬は、その地理的位置、気温、雨の降り方、利用できる水の量、植物の生長の速さ、などといったものに着目する。この場合、自然は「風土」ではなく、いわば一つの「資源」とみなされているようにみえる。

「風土」について、司馬は、和辻哲朗の『風土』のような、気候条件がその土地に住む個々人の気質や思考法を支配する、という考え方はとらない。『歴史を紀行する』のあとがきでふれているように、司馬は基本的にこのような考え方を否定している。そのくだりを引用すると、次のようである。

「風土などはあてにならない。

ある人物を理解しようとする場合、かれの出身地について通説になっている風土的概念から帰納するほど滑稽なことではない。たとえば、かれは鹿児島県人である、だから西郷隆盛のごとく豪放磊落である、などという。通俗的概念というべんりな大綱をうって人間をひといろにしてなんとなくなつとくしたような気分になる。第一、西郷隆盛が豪放磊落であるかといえなければそうではないであろう。

あるいは大阪人ががめつい、だからかれはがめつく商売がうまい、という。だからというようには論理はつながらない。それに事実認識もまちがっている。大阪人がはたしてがめついのか、それほど商売上手か、それを巨細にみていけばこの通念はじつにあやしいものである。風土的発想というのは、そのようにたよれない」

しかしながら、司馬は、「風土」というものの存在をまったく否定しているわけではない。それは大集団になったときに蒸れておいでてくる、とする。つまり、

「個々のなかには微量にしかなくても、その個々が地理的現在において数十万人あつまり、あるいは歴史的連鎖において数百万人もあつまると、あきらかに他とはちがうにおいがむれてくる。(中略)

その風土的特質から、人間個々の複雑さを解こうというのは危険であるにしても、その土地々々の住人たちを総括として理解するにはまず風土を考えなければならないであろう」という。

つまり風土というものは確かに存在するが、自然環境を直接、個々人の性格や行動、思考法に結びつけたりするのには、危険だ、といっているのである。

では対象が集団になったとしたら、どのように考えるか。司馬はこの点についてはつきりとは述べていないが、筆者は、司馬が自然条件と集団との間の中間項として、この稿の最初の方で述べた、「生業、生産・流通などの社会システム」というものをはさみこんでいる、と理解している。

この個々人が生活し、生きるために所属しているシステムは、それぞれの時代ごとに異なり、時間の経過の中で変化していくものである。しかも基本的にはその地域のもつ「自然資源」を活用して、できあがっているものとみることが出来る。たとえば、沖縄や北海道を除く日本列島においては、古墳時代以降、樹木の旺盛な復元力を利用して鉄をつくり、それをもとにふんだんな製鉄農具をつくった。そしてこのことがある意味では、異様に行動的で好奇心に富む日本民族というものをつくりだした。またオランダでは、北海のニシンを大量に漁獲して、それを加工して他の国に売り、それによって富を集積して世界最初の市民社会をつくりだした。

これらの例にみるように、各地域の「自然資源」は、それぞれの時代ごとの技術水準におおきく依拠していることがわかる。つまり自然条件の役割は、技術水準によって異なり、けっして人間の行動を直接決定するものではないのである。

このように考えると、じつは自然地理的条件と社会システムとの間には、さらに、歴史的条件と人文地理的条件を挿入したほうが適切だ

ということになる。この二つの条件が異なるからこと、各時代ごとの社会システムがちがってくるのである。この関係を図示すると、図1のようになるであろう。

さて人間集団の行動が、以上に述べたような社会システムの中で決められたとする。残りは、思想や宗教、文化、芸術、思考法など、人間の頭脳の産物である。

思想や文化は広く解すれば、人間活動の結果であるわけだから、やはり「上部構造」として、社会システムの上にのせるのが妥当であろう。図1には、そのような位置に、思想や文化を置いた。また政治体制もおそらく上部構造に含めてよいであろう。

ただし、いまさら事例をあげるまでもなく、思想や宗教、文化、政治体制などが、逆に人間の行動をおおきく左右することも確かである。したがって図では、両方向に矢印をつけて、相互の影響を示した。

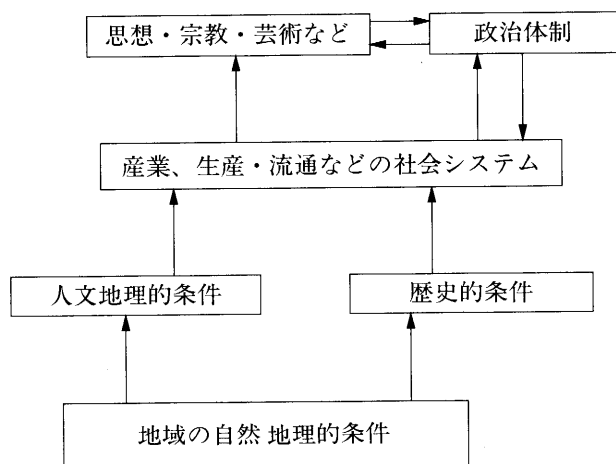


図1 司馬史観の構造

これまで述べてきたように、筆者は、司馬史観というものは、図1に示したような構造をもつものでないかと考えている。先にあげた①から⑦の事例は、いずれもこの構造をよく備えたものばかりである。また上の事例では、歴史小説はとりあげていないが、忍者もののような一部の小説を除き、司馬史観のよく現れた記述は、いくらでも指摘することができる。『国盗り物語』でも『竜馬がゆく』でも『坂の上の雲』でも何でもよい。読み進むうちに、そうした記述をいくらでも探しだせるはずである。

いうまでもなく、歴史を、このような構造の上に組み上げようと考えたのは、司馬遼太郎の創建であるが、このような型の歴史の記述は非常に理解しやすく、その上、司馬が、歴史のおおきな流れを見抜く、類稀な能力をもっているために、記述に広がりが生じ、きわめて魅力的なものになった。彼の史論や歴史小説が多くの読者をもっているというのも、当然のことなのである。

### 三 地図の多用について

ところで司馬遼太郎の小説や史論を理解しやすくしているものとして、地図の存在を落とすことはできない。『街道をゆく』や『坂の上の雲』を始めとして、司馬の作品には、地図が添付されているものが少なくない。しかしもし仮に、これらの小説や紀行文に地図がついていなかったとしたら、文章は非常に理解しにくくなってしまふであろう。

一般的にいつて、文学者の書いた紀行文や随筆には、地図のついていないことは稀である。そのため内容が非常にわかりにくくなってしまふことがよくある。たとえば、ライン川を何キロ下ると、支流の何川が合流し、そこから何キロ下ると、昔の渡しがあつて、などと書かれていても、わかりにくいこと、はなはだしいものがある。地図が一枚添えられていれば、非常に理解しやすいのだが、おそらく地図をつくるという発想がまったく欠如しているのであろう。

地図がついていない場合、筆者は手持ちの地図をとりだして参照する

ことにしている。それによって、始めて正確な理解ができるようになるからである。紀行文などでは、もっと地図を多用すべきであろう。

人間のもっている土地勘などはじつにあてにならないものである。筆者自身、ネパールのカトマンズからインドのデリーに飛ぶとき、てっきり南下するものだと思っていたが、実際はわずかに北上ぎみに西へ行くコースであって、驚いたという、恥ずかしい経験をもっている。このとき地図をよくみていれば、こんな間違いはしなくてもすんだはずである。地図の効用というものは、予想以上におおきいものである。

司馬遼太郎は地図の効用をよく理解している、数少ない作家の一人であり、このことは彼の作品の魅力を増し、理解を助ける役割を果たしていると考ええる。

ところで『ビジネスマン読本 司馬遼太郎』によれば、司馬遼太郎の作品はなぜか、女性にはあまり人気がないとのことである。ごく内輪でのアンケートの結果にすぎないが、読者は圧倒的に男性が多く、女性の読者はきわめて少ない。独断的に解釈すると、このことは女性の地図嫌いと関係があるかもしれない。

司馬遼太郎の歴史小説は、時間的な流れを追うだけでなく、それぞれの時代ごとに地理的、空間的な広がりを見せる。先に司馬史観の事例としてあげたものでも、このことははっきりと読み取れると思うが、小説を読む側としては、これは、歴史の流れを三次元空間のまま追跡しなければならぬということの意味している。この作業は、そういう発想に慣れたものには何ということのない作業であるが、慣れないものにとってはたいへん疲れる作業であるらしい。

筆者自身、大学で『第四紀学』という、自然環境の生い立ちを主題にした講義を担当し、似たような体験をしているので、このことはよく理解できるのだが、「山脈が隆起し、そのことによって気候が変化して氷河時代が訪れた。そして大陸氷河ができることによって海面が低下し、その結果、河岸段丘ができたり、生物の分布が決まったりした」などという話をする、とてもついていけない、と悲鳴をあげる学生が少なから

ず出てくる。やはり三次元空間が歴史的に変化するため、発想がついてこれなくなってしまうのである。ただこれは発想の問題であって、ついてこれない学生が劣っているわけではない。慣れれば、しだいについて来ることができるようになるのだが、やはり女子学生の方に、こうした発想を苦手とするものが多いようである。

また身近な例でいえば、車の助手席にいて、地図を読みながら、運転者にルートを示すナビゲーターの作業も、女性には苦手にするものが多いようにみえる。

## V おわりに

以上で本稿を終わる。

日本人の一人として、作家であり、歴史家であり、さらに「地理家」でもある司馬遼太郎をもつことができたことは、たいへんな幸せであったと思う。本稿のための作業は楽しかったが、一面、司馬遼太郎の秘密をあばくような感じがして、多少は後ろめたいような感じがしないでもない。もっともこんなものを書いたからといって、司馬遼太郎の人氣が陰るものでもないだろうが。

最初に書いたように、筆者は、地理学の関係者が司馬遼太郎から受けている、無形の恩恵というものは、非常におおきいものだと感じている。日本地理学会はこういう人こそ名誉会員に推薦すべきであろう。そのための制度がないのなら、新たにをつくってもらいたいと思う。

末筆ながら、司馬遼太郎の執筆活動が永遠につづくことを祈って、筆を置きたい。

## 注

(注1) 民衆の歴史をつくる力を重視する歴史学者・色川大吉(一九九四)は、司馬遼太郎の書く歴史小説は英雄史観にもとづくものだとし、司馬を次のように評している。「司馬遼太郎という人は非常に才気のある稀な人だけれど、歴史の本質というものに対してもう一歩わかっていないところがある。」

(注2) 作家・清水義範は、『猿蟹の賦』という小説を、司馬遼太郎の文体で書いている。しかしこれはあくまでパロディーである。清水はまた『商道をゆく』という小説を書いているが、これが『街道をゆく』のもじりであることはいうまでもないだろう。章立ても「坂の上の星」、「戦雲の門」、「峠の道」、「世に出る日々」、「燃えよ敷布」となっていて、清水が悪ふざけしていることがよくわかる。

## 文献

- 色川大吉(一九九二)『歴史の方法』、二六二ページ、岩波書店  
 尾崎秀樹(一九七五、再版一九九二)『歴史の中の地図』、四六二ページ、文藝春秋社  
 川喜田二郎監修(一九八九)『今西錦司 その人と思ふ』、五二七ページ、ぺりかん社  
 現代作家研究会編(一九九三)『ビジネススマン読本 司馬遼太郎』、二四五ページ、日本能率協会マネージメントセンター  
 斎藤清明(一九八九)『今西錦司 ―自然を求めて―』、二五四ページ、松籟社  
 中野美代子編(一九九三)『本多勝一を解説する』、六九二ページ、晩聲社  
 丹羽文夫(一九九三)『日本の自然観の方法 今西生態学の意味するもの』、二三八ページ、農文協  
 矢沢永一(一九九四)『司馬遼太郎の贈りもの』、二五八ページ、PHP研究所  
 なお本文中に引用した司馬遼太郎の作品は、ここでは省略した。

\* Novelist Shiba Ryōtarō as a geographer : Takeji KOIZUMI (Department of Geography) (Received August 30, 1994)